

悠久の京を訪ねて Part II Vol.1



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

古代の龍(竜)

京都府京丹後市



龍(竜)のイメージはいつから日本に伝わったのか

「今年は兎、来年は辰」

年末になるとよく話題になる干支は、もともと中国殷代の暦法の表記に遡ります。この十二支「子・丑・寅・・・」に、鼠、牛、虎などの十二の動物(十二獣)をあてて、表記するようになるのは、やや時代がくだり戦国時代や漢代のことです。日本では、飛鳥時代の奈良県のキトラ古墳の壁画で獣頭人身の十二支像の一部が確認されており、古代の十二支を遺跡や遺物で確認できる古い例になります。

龍(竜)は十二支のうち、唯一想像上の動物で、古代中国



高山12号墳横穴式石室

では長い身体に、鱗、角、爪をもつ神秘的力を有するものとして扱われてきました。その図像は各種の器物や壁画などにみることができます。

日本では、弥生時代の土器の絵画にそのイメージを垣間見ることができますが、中国由来の龍(竜)のイメー

ジを確実におさえられるものには、古墳から出土する銅鏡の図像や刀の柄頭の意匠があります。

金色に輝く双龍環頭大刀

丹後半島の京丹後市丹後町にあります京都府指定史跡高山12号墳は、直径18m、高さ2.5mの横穴式石室墳で、6世紀末から7世紀初頭に築造されました。昭和62年度に発掘調査が行われ、石室内から多量の土器、武器、馬具等とともに金銅装双龍環頭大刀柄頭2



高山12号墳出土 環頭大刀柄頭

点が出土しました。環頭大刀は環状をなした大刀の柄頭の環内や環体に龍(竜)の装飾をほどこしたもので、中国や朝鮮半島の文化の流入の所産とみることができる遺物です。

この柄頭の意匠は、扁平な透かし彫りに横向きの2匹の竜が向きあって玉をくわえているもので、龍(竜)の意匠としてはかなり簡素化したものです。当センターのロゴマークになっています。(所蔵 京丹後市)